

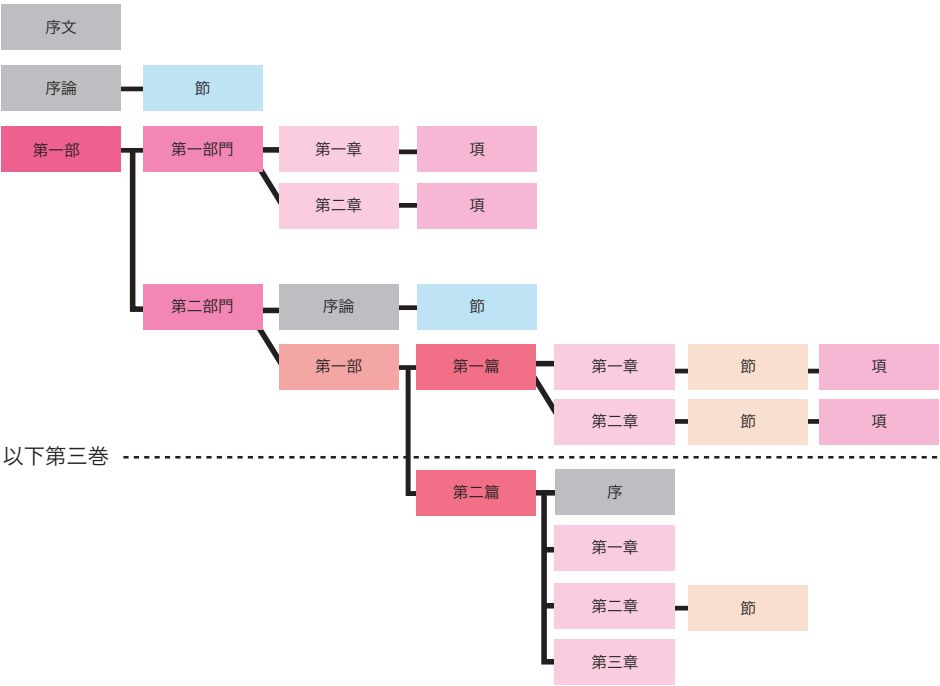
『純粋理性批判』 カント／中山 元・訳

タイトル・リスト 1 第一巻・第二巻 [2010.09.13]

《修正》

076 「叡智的直観と自己意識について」 → 「知的直観と自己意識について」 (2010.09.13)

第一巻／第二巻



第一巻

n=原注

- エピグラム ヴェルラムのペーコン『大革新』の序
- 献辞

序論
第一節 純粋な認識と経験的な認識の違いについて
001 経験なしでは何も始まらない
002 認識は合成されたものである
003 アプリオリとアポステリオリ
004 いわゆるアプリオリな認識
005 アプリオリな認識と純粋な認識
第二節 わたしたちはアプリオリな認識を所有していること、日常的な知性の利用にもアプリオリな認識が含まれないわけではないこと
006 アプリオリな認識の二つの基準――必然性と普遍性
007 アプリオリな純粋判断の実例
第三節 哲学には、すべてのアプリオリな認識の可能性、原理、範囲を規定する学が必要である
008 経験を超越する認識
009 純粋理性の課題
010 理性の誤謬
第四節 分析的な判断と総合的な判断の違いについて
011 二つの判断の定義
012 経験的な判断
013 アプリオリな総合判断の謎
第五節 理性に基づくすべての理論的な学には、アプリオリな総合判断が原理として含まれる
014 数学的な命題と矛盾律
015 純粋数学のアプリオリ性
016 算術の命題が総合的であることの証明
017 純粋幾何学の総合性
018 幾何学と総合命題
019 自然科学とアプリオリな総合命題
020 形而上学とアプリオリな総合命題

第六節 純粋理性の普遍的な課題

- 021 純粋理性の課題
- 022 ヒュームと形而上学の不可能性
- 023 二つの枢要な問い
- 023n 純粋な自然科学の可能性
- 024 形而上学の問い
- 025 学としての形而上学の可能性
- 026 批判と学
- 027 学の課題
- 028 形而上学の目的とその必要性

第七節 純粋理性批判と呼ばれる特別な学の理念と区分

- 029 純粋理性の批判のための予備学、超越論的な哲学
- 030 超越論的な哲学と批判
- 031 批判の課題
- 032 超越論的な哲学と道德
- 033 超越論的な哲学の区分

n=原注

第一部 超越論的な原理論

第一部門 超越論的な感性論

第一項

- 034 直観の力
- 035 感覚と現象
- 036 感覚の素材と形式
- 037 経験的な直観と純粋な直観
- 038 感性の理論（エステティーク）
- 038n エステティークという語について
- 039 感性のアプリオリな形式——空間と時間

第一章 空間について

第二項 空間の形而上学的な解明

- 040 外的な感覚と内的な感覚の形式
- 041 空間のアプリオリ性
- 042 空間の必然性
- 043 空間——純粋な直観
- 044 概念ではなく、直観としての空間

第三項 空間の概念の超越論的な解明

- 045 超越論的な解明の定義とそのための条件
- 046 幾何学の実例
- 047 主体の外的な感覚の形式としての空間
- 048 幾何学の可能性

前記の概念からえられる結論

- 049 空間と物自体の特性
- 050 感性の主観的な条件としての空間
- 051 人間の立場
- 052 空間とその他の主観的な像の差異
- 053 物自体は認識できない

第二章 時間について

第四項 時間の概念の形而上学的な解明

- 054 時間のアプリオリ性
- 055 時間の必然性
- 056 時間は一つの次元をもつ
- 057 感性による直観の純粋な形式としての時間
- 058 時間の無限性

第五項 時間の概念の超越論的な解明

- 059 変化や運動の概念と時間

第六項 これらの概念からえられた結論

- 060 時間が主観的な条件でなければならない理由
- 061 直線によるアナロジー
- 062 現象が成立するための条件としての時間
- 063 認識の条件と時間
- 064 時間の「実在性」と「観念性」

第七項 説明

- 065 時間の現実性の意味
- 065n 時間の規定について
- 066 空間と時間の現実性と観念論
- 067 空間と時間の絶対的な実在性を主張する人々の誤謬
- 068 超越論的な感性に含まれる要素は空間と時間だけである

第八項 超越論的な感性論についての一般的な注

- 069 感覚的な認識の基本特性
- 070 空間と時間という条件の要約——物自体の認識の否定
- 071 概念と像の違い
- 072 ライブニッツ哲学の批判
- 073 ロック批判
- 074 感性論の役割
- 075 アプリオリで必然的な総合命題のための条件



第八項 超越論的な感性論についての一般的な注

- 076 知的直観と自己意識について
- 077 現象と仮象の違い
- 077n 仮象の発生
- 078 神は空間と時間のうちに存在するか
- 079 派生的な直観——天使が直観するとき

超越論的な感性論の結語

- 080 超越論的な哲学の課題のための第一条件

序文（第二版）

- V01 学としての確実な道の発見
- V02 論理学の実例
- V03 予備学としての論理学の限界
- V04 理性の二つの認識
- V05 純粋な学としての数学と物理学
- V06 数学の革命
- V07 自然科学における革命
- V08 自然科学と思考革命
- V09 形而上学という闘技場
- V10 確実な道への疑念
- V11 コペルニクス的な転回
- V11n 実験の役割
- V12 理性と無条件的なもの
- V12 n1 総合の手続き
- V12 n2 仮説としての思考方法の変革
- V13 形而上学の幸運と義務
- V14 批判の効用の総括
- V14n 概念の客観的な妥当性
- V15 学派の〈蜘蛛の巣〉の崩壊
- V16 批判の目的
- V17 第二版の修正の目的
- V17n 修正点について



補遺

序文（初版）

- R01 理性の宿命
- R02 理性の闘争の場
- R03 形而上学の悲劇
- R04 形而上学の暗夜
- R05 理性の法廷
- R05n 批判の時代
- R06 形而上学の批判
- R07 批判の達成したこと
- R08 批判のプロジェクトの謙虚さ
- R09 内容からみた批判に必要な二つの特性
- R10 形式からみた批判に必要な二つの特性
- R11 確実さについて
- R12 「純粋な認識力の根拠づけ」の部分の重要性と読者への注意
- R13 明瞭さについて
- R14 形而上学の完成に向かって
- R15 残された課題
- R16 誤植と表の配置について



序論（初版）

第一節 超越論的な哲学の理念

- P01 経験の意味、アプリアリとアポステリアリ
- P02 アプリアリな認識の存在
- P03 経験の限界を超越する認識
- P04 この種の認識の重要性
- P05 理性の誤謬
- 分析的な判断と総合的な判断の違いについて
- P06 二つの判断の定義
- P07 〈あるものX〉
- P08 Xとしての経験
- P09 アプリアリな総合判断の謎
- P10 総合判断の謎
- P10n 過去の空しい試み
- P11 超越論的な哲学の課題

第二節 超越論的な哲学の区分

- P12 超越論的な哲学と批判
- P13 批判の課題
- P14 超越論的な哲学と道徳
- P15 超越論的な哲学の区分

第二巻

第一部	超越論的な原理論
第二部門	超越論的な論理学
序	超越論的な論理学の理念
第一節	論理学一般について
081	認識の二つの源泉
082	感性と知性
083	二つの論理学
084	純粋論理学と応用論理学
085	純粋論理学の二つの規則
086	応用論理学のテーマ
第二節	超越論的な論理学について
087	一般論理学の考察対象
088	アプリアリな認識と超越論的な認識の区別
089	超越論的な論理学の理念
第三節	一般論理学を分析論と弁証論に分割することについて
090	真理とは何かという問い
091	問いの適切さ
092	真理の基準の不可能性（内容の側面から）
093	真理の基準の可能性（形式の側面から）
094	一般論理学の区分と弁証論
095	弁証論についての警告
096	弁証論という用語の意味
第四節	超越論的な論理学は超越論的な分析論と弁証論に区分される
097	超越論的な論理学の目的

第二部門の第一部	超越論的な分析論
098	分析において留意すべき点
第一篇	概念の分析論
099	概念の分析論の目的
第一章	すべての純粋知性概念を発見する方法について
100	機械的な分類の欠点
101	超越論的な哲学の分類原則
すべての純粋知性概念を発見するための超越論的な方法	
第一節	知性一般の論理的な利用について
102	知性と判断
すべての純粋知性概念を発見する方法	
第二節	
第九項	判断における知性の論理的な機能について
103	判断表
104	注意点
105	単称判断と全称判断の違い（第一の「判断の量」についての補足）
106	無限判断と肯定判断（第二の「判断の性質」についての補足）
107	仮言判断と選言判断の特性（第三の「判断の関係」についての補足）
108	判断の様態の特殊性（第四の「判断の様態」についての補足）
108n	思考の三つの能力
すべての純粋知性概念を発見する方法	
第三節	
第一〇項	純粋知性概念、すなわちカテゴリーについて
109	総合とは
110	認識の起源としての総合
111	総合と想像力
112	純粋な総合
113	認識に必要な三つの要素
114	知性の二つの機能



第一〇項 純粋知性概念、すなわちカテゴリーについて

- 115 カテゴリー表
- 116 カテゴリーを発見する方法
- 117 派生概念についての注
- 118 準カテゴリー
- 119 トピカ役割

第一一項

- 120 カテゴリー表の役割
- 120n 思索を旨とする学
- 121 カテゴリー表の二分割
- 122 数学的なカテゴリーと力学的なカテゴリー
- 123 カテゴリー表のそれぞれの部門が三分割されること
- 124 第三のカテゴリーの意味
- 125 相互性のカテゴリーの特異性
- 126 その特異性の説明
- 127 因果関係と相互関係

第一二項

- 128 存在についてのスコラ哲学の命題

第二章 純粋知性概念の根拠づけ [=演繹]

第一節

第一三項 超越論的な根拠づけ一般の原理について

- 129 根拠づけ [=演繹] の定義
- 130 超越論的な根拠づけの役割
- 131 アプリオリな概念の超越論的な根拠づけの必要性
- 132 純粋でアプリオリな概念の根拠づけの性格
- 133 超越論的な根拠づけの必要性
- 134 空間と時間の役割の再考
- 135 知性の難問
- 136 カテゴリーの〈威厳〉

第一四項 カテゴリーから超越論的な根拠づけへの移行

- 137 対象を認識するための条件
- 138 超越論的な根拠づけの原理
- 139 イギリス経験論の問題点
- 140 本書の課題
- 141 判断表の概念とカテゴリー表の概念の違い——実体の概念を例として

第二節 純粋知性概念の超越論的な根拠づけ

第一五項 結合一般の可能性について

- 142 知性による〈総合〉の根源性
- 143 総合的な統一
- 143n 像についての意識

第一六項 自己統合の意識 [=統覚] の根源的で総合的な統一について

- 144 自己統合の意識とは
- 145 認識の最高原則
- 145n 超越論的な哲学の最高点
- 146 自己統合の意識における根源的で総合的な統一

第一七項 自己統合の意識の総合的な統一の原則は、知性の利用のための最高原理である

- 147 直観が可能となるための二つの原則
- 147n 意識の統一の根源性
- 148 意識の統一の役割
- 149 第一の純粋な認識原理



第一七項 自己統合の意識の総合的な統一の原則は、知性の利用のための最高原理である

- 150 この命題は分析的な命題である
- 151 人間の知性の有限性

第一八項 自己意識の客観的な統一とは

- 152 自己統合の意識の超越論的な統一と経験的な統一

第一九項 すべての判断の論理的な形式は、判断に含まれている概念の客観的な統合のうちから生まれる

- 153 判断の定義の誤謬
- 153n 三段論法の議論のごまかし
- 154 判断の定義と役割

第二〇項 すべての感覚的な直観はカテゴリーにしたがう。
カテゴリーは、多様なもののそのものが意識のうちにまとまることができるための唯一の条件である

- 155 カテゴリーの定義

第二一項 補足の注解

- 156 カテゴリーの働き
- 156n 直観の統一
- 157 神の知性と人間の知性

第二二項 カテゴリーは、経験の対象に適用されるだけであり、物の認識のためにはほかの用途では利用されない

- 158 カテゴリーの役割

第二三項

- 159 知性の利用の限界
- 160 感覚的でない直観の客体にカテゴリーは適用できるか

第二四項 感覚能力の対象一般へのカテゴリーの適用

- 161 カテゴリーが適用できる条件
- 162 図示的な総合と知性的な総合
- 163 想像力の定義
- 164 自己についての逆説
- 165 知性と自己統合の意識の関係
- 166 内的な感覚能力の限界

第二四項 感覚能力の対象一般へのカテゴリーの適用

- 166n1 「超越論的な」運動
- 166n2 内的触発としての〈注意〉について

第二五項

- 167 自己の存在の認識と客体としての自己の認識
- 167n 自発性としての自己直観について

第二六項 純粋知性概念を可能的な経験に普遍的に利用できることの超越論的な根拠づけ

- 168 自然科学の可能性
- 169 把握による総合
- 170 経験の条件としてのカテゴリー
- 170n 直観の形式と形式の直観
- 171 量のカテゴリーによる把握の実例
- 171n 自発性としての想像力と自己統合の意識
- 172 原因のカテゴリーによる把握の実例
- 173 自然の謎
- 174 カテゴリーにしたがう自然

第二七項 知性の概念の根拠づけからえられた結論

- 175 経験的な認識
- 175n 経験を越えた理性の利用の目的
- 176 純粋理性の後成説
- 177 純粋理性の前成説

この根拠づけの要約

- 178 根拠づけの要約
- 179 項目分けについて

補遺

[初版の] 純粋知性概念の根拠づけ [=演繹]

第二節 経験が可能となるためのアприオリな根拠について

- D01 〈アприオリな概念〉という概念の矛盾
- D02 アприオリで純粋な概念の客観的な実在性
- D03 純粋知性概念とは
- D04 カテゴリーと純粋知性概念
- D05 三種類の総合

さしあたりの注意

- D06 難解さについて

一 直観における把握による総合について

- D07 時間の重要性
- D08 把握による総合
- D09 把握による純粋な総合

二 想像力による再生の総合について

- D10 再生の経験的な総合が起こるための前提
- D11 想像力の純粋な超越論的な総合
- D12 想像力の超越論的な能力としての再生の総合

三 概念による再認の総合について

- D13 継続したものの統一性
- D14 物を掴む意識
- D15 〈あるもの一般＝X〉
- D16 認識と対象の結びつきの必然性
- D17 対象Xと自己統合の意識による統一
- D18 認識における概念の働き
- D19 必然性と超越論的な条件
- D20 経験的な自己統合の意識
- D21 超越論的な自己統合の意識
- D22 超越論的な対象X
- D23 認識と自己意識

四 アприオリな認識としてのカテゴリーの可能性についてのさしあたりの注意

- D24 一つの経験
- D25 経験の根拠

四 アприオリな認識としてのカテゴリーの可能性についてのさしあたりの注意

- D26 カテゴリーの意味
- D27 自己統合の意識による根源的な統一
- D28 〈連想〉という概念への疑問
- D29 超越論的な親和性
- D30 人間の認識にしたがう自然

第三節 知性と対象一般の関係について、対象をアприオリに認識する可能性について

- D31 認識の三つの源泉
- D32 アприオリな土台
- D33 純粋な自己統合の意識の原理
- D33n 思考にとって根源的な法則
- D34 想像力の産出的な総合
- D35 超越論的な総合と超越論的な統一
- D36 カテゴリーの役割
- D37 想像力の作用
- D37n 想像力の重要性
- D38 再生的な想像力の役割
- D39 像の統一の主観的な根拠——連想
- D40 像の統一の客観的な根拠——現象の親和性
- D41 知覚が可能な条件
- D42 想像力の超越論的な機能
- D43 自己統合の意識と想像力
- D44 認識の三つの機能（把握、再生、再認）とカテゴリーの役割
- D45 自然の秩序
- D46 規則を与える能力としての知性
- D47 法則の源泉としての知性
- D48 カテゴリーの超越論的な根拠づけの課題

純粋知性概念のこの根拠づけの正当性と、この根拠づけしか可能でない理由の概略的な提示

- D49 アприオリな概念の源泉